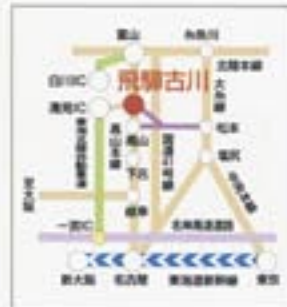


時は春、“京の雅”と“江戸の粋”が調和した飛騨の匠の町並みに動と静ダイナミックな鼓動と華麗な屋台行列が織りなす時代絵巻

古川祭時市街地案内図



開催場所 / 古川町市街地一円(市街地は起し太鼓の里広場を中心として徒歩15分圏内です。)
 ※起し太鼓打ち出しは起し太鼓の里広場です。
 ※屋台・起し太鼓の通行ルートは年によって変わりますが、市街地内であることに変わりありません。
 駐車場 / 当日は、大変な混雑が予想されますので、駐車場までの通路は誘導員又は誘導看板の指示にしたがってください。
 交通規制 / 市街地内19日~20日中車両交通規制あり。
 臨時列車・バス / 19日夜、高山~古川間臨時列車(古川発高山行きで深夜24時過ぎまで運行されます。)(JR17分、バス30分)

祭期間中は大変な混雑が予想されます。スリや空き巣狙いには十分ご注意ください。
 起し太鼓や付け太鼓の見学などでケガをされても責任は負えませんのでご注意ください。(観光客は起し太鼓には参加できません)

飛騨古川見どころ・ご案内



瀬戸川と白壁土蔵街
 白壁土蔵に沿って流れる瀬戸川。大きな錦鯉がゆったり泳ぎ、四季折々に風情を変える小径は情緒たっぷりの散策路です。



起し太鼓の里(飛騨古川まつり会館)
 ハイビジョン立体映像ホール、祭屋台展示、からくり実演、起し太鼓試し打ちなど、1年中、古川祭の興奮と感動が体験できる祭ミュージアム。
 ●入館料 / 大人800円(4月19日・20日は半額)
 ※19日は午後9時迄閉館



飛騨の匠文化会館
 飛騨の匠の歴史や技術、大工道具一式などを一堂に。現代の飛騨の匠によるよらい壁の蔵造り風建物は、釘を1本も使っていないのが特徴。
 ●入館料 / 大人200円
 ※19日は午後9時迄閉館



起し太鼓

起し太鼓は古川祭の「軸」の顔である。千人をこす提灯行列に導かれた大太鼓めがけて町内各組の付け太鼓が激突する。激しい攻防戦は二十日未明まで続く。



屋台曳行

古川のまちは「静の世界」が広がる。雅びなる「静の世界」が広がる。気多若宮神社を出立した御神輿が、古式ゆかしく、賑かに町内を遊行する町内の各所では九台の屋台も曳行され獅子舞も繰り出す。その美しくも華麗な時代絵巻は見るもの心を揺さぶり、忘れ得ぬ感動を与えてくれる。

朝霧たつ都 飛騨古川

古川祭 / 飛騨古川へのお問合せは 古川町観光協会 0577-73-2111

四月十九日・二十日
飛騨古川祭

感動、喝采、鼓動。まちが心揺るがすステージとなる二日間。

- ◆十九日 夕刻
- ◆十九日 午後九時頃
- ◆十九日・二十日
- ◆十九日・二十日
- ◆十九日・二十日
- ◆御神輿町内遊行



子供歌舞伎

明け二十日。「京の雅」と「江戸の粋」が調和した古川のまちは祭屋台が曳き揃えられる。屋台ではからくりや子供歌舞伎が披露される盛大な晩餐を浴びている。

二日間 たっぷり堪能 飛騨古川祭

天下の奇祭といわれ
全国に名を馳せる古川祭とは
町内に鎮座する気多若宮神社の例祭で
国の重要無形民俗文化財にも指定されている
伝統神事です。

この祭は神社本殿での神事、
および古式ゆかしい「御神輿行列」が中心となって、
“動”の「起し太鼓」と“静”の
「屋台行列」が二大祭事として加わり、
三つの行事群により
4月19日、20日の2日間に渡って
盛大な時代絵巻が
繰り広げられます。



日程

四月十九日・二十日(毎年不変)



屋台からくり、子供歌舞伎奉納
(奉納時間は各15分程度)

各屋台ごとそれぞれの町内各所にて午前8時~午後4時頃までの間、不定期に4~5回奉納されます。

屋台曳き揃え場所にて3台の屋台が順番に奉納します。各屋台1日3回づつ奉納します。(時間は9時頃より16時頃までの間。)

※雨天時は各屋台曳きにて不定期に奉納します。

※起し太鼓は雨天決行 ※御神輿巡行、獅子舞、屋台曳行は雨天中止(屋台は屋台蔵にてご覧頂けます)
※起し太鼓の打出しは「起し太鼓の里広場」で変わりませんが、巡行順路は毎年変わります。(市街地内)
注:巡行順路は毎年4月10日頃完成のチラシをご参照下さい。
※19日の夜、20日の屋台曳き揃え場所は市街地内で一之町、二之町、三之町、駅前等毎年変わります。

飛騨古川祭のいわれ

変太後風土記によると明治三年当時の祭の様子がうかがえます。本祭の日の未明、その年の屋台曳行をとりきる主事組が太鼓を打ち鳴らして町々を巡り祭りが行われることを各町内の屋台組にふれてまわります。江戸時代には高山でも町内の賑りを覚してまわったといわれ、今も隣の上室村木場神社の例祭には「起さんかどうじゃ」と繰り返すものがあります。このように祭の開始を告げる合図として目覚ましのために太鼓を打ち鳴らしたのが「起し太鼓」です。しかし、当時は現在のような形の起し太鼓ではなく、付け太鼓の形に見られるように小さな太鼓をうらなした程度のものであったと思われます。現在のように楯に銅製の太鼓を載せるような形になったのは大正時代末の頃からです。この太鼓の音を聞いた各町内の屋台は競いながら連合して気多若宮神社の神輿が渡御する御旅所前へむかう。こうして集まった屋台は先頭に神楽台、次は三番曳、最後尾はその年の主事組の屋台でそれ以外は御旅所に早ついた順番に曳き揃えられる。全屋台が各々競い合いながら、前日試しの芸として各町の町内で披露した芸を今度は試みとしてではなく神に披露し奉納する。そして、神幸の場合は、その前廻をつとめる全屋台が警護しつつ従い、その後夕刻になって再び神社へ還御して行く神幸を見送る。その後提灯をさしつりど灯した屋台はそれぞれの町組内へ曳き別れていくのです。こうした、古川祭曳行の原型を見てみると現在のそれぞれの祭事の意味がくみとれるでしょう。

起し太鼓

4月19日夜に行われる「起し太鼓」は、数百人のさらし姿の裸男たちが担ぐ檜上に直系80cmの大太鼓を乗せ、その上で二人の若者がばちを振り下ろし、大太鼓を打ちながら町中を巡行します。町の辻々では、「付け太鼓」と呼ばれる小太鼓を持った若者集団が待ち構え、大太鼓の楯に突っ込み激しい攻防戦を繰り広げます。「起し太鼓」のもっとも迫力のある場面、これが町のいたるところで展開されます。



屋台

古川の屋台は東西文化融合の結晶といわれています。江戸から移入された原型に京都からカラクリ人形が入って飛騨独自の三段構造の形ができました。ここに塙師の技術や京都の金具、織物が加わり屋台芸術が開花したのです。文献としては、安永5年(1776年)に建造された事を記した古文書、天明2年(1782年)に9台の屋台が曳行した紀行文があり、古川の人々が古くから祭礼の主軸として位置付けていたことが偲べれます。



屋台からくり、子供歌舞伎

町内を獅子、鬨笛、神楽、神輿など数百人の行列が巡行する中、古川祭本祭の主役、9台の屋台が曳き揃えられる。飛騨の匠の技術と粋を集めたきらびやかに動く陽明門ともいわれ、その屋台の中段では愛くるしい子供歌舞伎やからくり人形が奉納され、見物客を魅了する。(19日夕刻には夜祭として提灯をつけた屋台行列がとても美しく町並みを巡行します。)

からくり人形



青龍台(殿町組) [20分]
福祿寿と童子人形が、25条の糸で縛られています。謡曲「鶴亀」に合わせて操れるからくり人形は、大津絵「外方の梯子割り」を題材としたもので、唐人が梯子を登り、亀が腹に変わる巧妙なからくりです。

麒麟台(老え町下組) [15分]
童子人形が、20条の糸で操られます。謡曲「石橋」に合わせて童子が獅子頭をかごって舞い、花吹雪を散らせます。

子供歌舞伎



白虎台(三之町下組) [20分]
昭和56年から59年の屋台大改修の際に、屋台の踊り台を復元し、百年以上途絶えていた子供歌舞伎の「橋弁慶」を復活させたものです。

獅子舞
19日・20日、日中市街地各所にて

御神輿巡行
19日・20日、日中市街地各所にて